INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.62

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1990年11月20日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-821-3737㈹
FAX.03-821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

第44回 MRAコー世界大会レポート

Freeing the forces of change

総合テーマ
『様々な変革の動きを活かすために』
1990年7月9日～8月26日

日本からも四十二名が参加した今夏のコー世界大会

今年のコーMRA世界大会は「様々な変革の動きを活かすために」を全体テーマに七月九日から八月二十六日まで、以下のような様々な会議が開催された。

①開会式（七月九日～十六日）「隣人同士、国同士、東と西とが互いに学びあうもの」
②産業人会議（七月十八日～二十二日）「国際競争の激化と、望まれる質と動機」
③第五回日米欧財界人円卓会議（七月二十三日～二十五日）
④青年主催会議（七月二十九日～八月五日）「新しいヨーロッパの形成をめざして」

◀主な内容▶

◇第43回MRAコー世界大会レポート　1P
テーマ「様々な変革の動きを活かすために」

◇第5回コー円卓会議レポート　4P

◇コー世界大会に参加して　8P
■深沢達也　武蔵野市市議会議員
■辻井昭雄　近畿日本鉄道株式会社取締役
■下崎京子　大妻女子短期大学

◇青年主催会議参加レポート　13P
塚本真由子・斉藤太郎・顔陳真琴・寺村由美子・西森義洋・篠原多佳

◇世界のMRA最近の動き　MRAワールドニュース　18P
◉ブーゲンビル島問題解決にMRAが支援（パプアニューギニア）
◉MRA青年スタディーコース、来年はインドで開催（インド）

◇台湾MRA国際青年キャンプ（IYC）レポート　19P
テーマ
『希望に満ちた未来を創るための若者の役割』
会場：台北、高雄　期間：1990年7月21日－30日
■山波　里子「心を開くことの大切さを学んだユースキャンプ」
■藤田　寛「台湾MRA国際青年キャンプに参加して」
■飯島亜由子「日本人は嫌いだ！」―閉じていた心が開いた―

⑤都市問題会議（八月七日～十二日）
「都市の変革とコミュニティー危機の根本問題を考える」
⑥アジア・アフリカ・太平洋・中南米主催会議（八月十五日～二十二日）
「共通の問題・目的を担うパートナーシップ」
⑦閉会式（八月二十三日～二十六日）
「様々な変革の動きを活かすために」

他に専門家を交えた特別会議として「第三回環境問題に関する対話」も開催された。

民主主義から環境まで様々な問題が話し合われる

開会式には四十三ヵ国から五百四十人余りが参加したが、この中にはソ連や東欧からの参加者も多く含まれていた。フランスの国会議員は「非人間的な全体主義から逃れた人たちが資本主義の非人間的な面に直面するほど悲しいことはないだろう」と前置きして、「真実ほど強力なものはないが、これを手にするのは難しく、しかも一人ひとりが自分で見いださなければならない」と語った。

続いて開かれた産業人会議では、環境保全の重要性が強調された。ヨーロッパ各国にまたがって流れるドナウ川の汚染改善には国際的な協力が必要であるとハンガリーの建設次官が訴えた。この会議には環境問題に積極的に取り組むソ連企業の若手グループも参加していた。日本からも近畿日本鉄道の辻井昭雄取締役と上田正博労働組合執行委員長、武蔵野市の深沢達也市会議員が出席した。

二日間にわたって開かれた日米欧財界人円卓会議には、日本からは住友電気工業阪本勇相談役を初め七名が参加した。今年で五回目をむかえた同会議だが、今回はブリュッセルのEC本部を訪ねてEC幹部と意見交換をしたり、ソ連科学アカデミー・システム研究所所長グビシアニ博士やインドのパトディア元商工会議所会頭をゲスト・スピーカーとして迎えるなど新たな広がりを見せた。また、晩餐会にはベルン駐在の大嶋鋭男日本大使も出席した。

七月末から八月初めに開かれた青年主催会議では、ベルリンの壁が崩壊した現在、そして二十一世紀に向けてのヨーロッパの将来が話し合われ、日本からは中学生六名を含む関西日本・スイス協会派遣の代表団と埼玉県浦和市の日本語学校、埼玉国際交流語学院の榊たか子理事長と主婦の小宮綾子さんおよび短大生二名が参加した。フィンランドの女子大生は継母との和解という個人的体験に触れたあと、「人は、心の壁を乗り越えた時に真の解放を感じることができると思う」と述べた。青年主催というだけあって、ヨーロッパのティーンエイジャーたちが多く参加していたが、東欧変革などを初めとする世界の時事問題にも彼らなりの問題意識を持って堂々と意見を交換している姿が印象的であった。

続く都市問題会議では、世界各都市が抱える諸問題解決のヒントを見い出すべく様々な体験の交換が行われたが、その中には失業問題が深刻化しつつあるポーランド・ウッジ市のパルカ市長の姿もあった。アメリカのアトランタ市からは十五名の黒人学生グループが参加し、同市の抱える若者のアルコール中毒、麻薬、犯罪などを激減させた成果について報告したが、同じ若者がその問題の解決に努力しているしんしな姿勢が伝わってきた。また、多人種のコミュニティーが存在するイギリスのニューキャッスルから参加したインド系イギリス人は「異人種間におけるやり方考え方の違いを単にあげつらうのではなく、相手独自の文化や風習を理解しようとする姿勢が必要である」と語った。

続いて開催されたアジア・アフリカ・太平洋・中南米主催会議では、各国の民族衣装に身を包んだ[illegible]者の姿

●ミハイル元国王夫妻を囲むルーマニアの青年たち

●多忙なスケジュールにも拘らず、夫人同伴でアジア・アフリカ・太平洋・中南米主催会議に参加したカンボジア国民政府のソン・サン首相

が一段と華やかさを増すなか、カンボジア国民政府ソン・サン首相のカンボジア和平の実現のための協力を訴える演説も行われた。政治危機や人種間の抗争などの諸問題の絶えないこれらの地域の中においてめざましい経済発展を遂げている韓国の参加者は「分断された半島に暮らす人々の心がまた一つに結ばれる日が来るよう微力ではあるが、努力を続けていきたい」と述べた。また、フィリピン外務省に勤める女性は、民主主義を機能させるためには、国民がモラルの基盤を確立することが大切であると訴えた。

東欧からの参加者が激増

今年で四十四回目を迎えたコー世界大会であったが、今年最大の特徴はなんといっても東欧からの参加者の激増であった。昨年来の東欧諸国の劇的な変革は、コーの会議にも反映された。マウンテンハウスの収容人員は、五百名だが七月末には参加者数が七百人となり、事務室を急遽寝室にして簡易ベッドを入れるなど様々な工夫を凝らして、どうにか全員の床を揃えることができた。

「あなたもポーランドの方ですか」「いいえ、ブルガリア人ですよ」。そんな会話をする姿があちらこちらで見受けられた。合計四百人近くがソ連と東欧から参加したことをコンピューターが記録していた。昨年はポーランドから約六十人が参加して、話題を呼んだが、今年はその七倍近い人数である。ポーランド、チェコスロバキア、ハンガリー、ルーマニア、ユーゴスラビア、東ドイツ、ブルガリア、そしてソ連とほぼ全東欧諸国から参加があった。昨年の夏には想像もつかなかったことである。

そうした中で印象に残ったことは、ルーマニアから参加した二十名の若者たちとミハイル元ルーマニア国王夫妻との会見であった。一九四六年に退位させられたミハイル元国王は現在はジュネーヴに住み、コー世界大会には毎年のように参加している。今年四月に現政権によって帰国を拒否されたミハイル元国王が、母国民のしかも若い世代の話に耳を傾ける姿もコーならではの光景とも言えるかも知れない。

対立構造の変化を受けて問われるコーの新しい役割

こうして東欧諸国の人々が一堂に会しての会議は今回が初めてということであったが、「ソ連人とは一緒に料理したくない」「熊は嫌いだ」と公言する東欧の人たちが見られたのも事実である。また、ソ連の劇団によるチェーホフの劇が始まってまだ三分とたたないうちに、席を立つ東欧の人の姿もあった。第二次世界大戦が終わって間もない頃のコー世界大会で、「ドイツ人がいるから帰らせていただきます」といったフランス人女性がいた。しかし、その女性はやがて「過去を忘れることはできないが、許すことはできる」という境地に達するが、そこまでたどりつくためには様々な葛藤があったに違いない。

モスクワのあるジャーナリストは、「我々ソ連人は多くの人たちに対してお詫びしなければならない。悔い改める心をもって各自が責任を取り、心に自由を得てこそ、我々の直面する多くの問題に答えを与え、人間の尊重、自由、個人の価値観等を共有できるヨーロッパをつくりあげることができるだろう」と語った。国民感情という面において、戦後の独仏関係と現在のソ連と東欧の関係を同一視することはできないが、東西対立という図式が薄れていく一方で地域紛争が多発するという新時代を迎えて、コーが新しいスタート地点に立ったことは確かである。

（事務局・杉　裕雄）

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円
(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌―MAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

- ●世界家族の仲間入り
- ●信頼できる人との出合い
- ●新時代に必要な情報
- ●心身の健康
- ●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度―口50、000円（寄付扱い・年額）を新たに設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

第五回コー円卓会議レポート

■場　所：ベルギー、ブリュッセル・EC本部
　　スイス、コー・マウンテンハウス
■日　時：1990年7月23日(月)～25日(水)

…日米欧財界人円卓会議(コー円卓会議)…

貿易摩擦の激化と海外での日本のイメージの悪下を懸念したフレデリック・フィリップス氏(オランダ)とオリビア・ジスカールデスタン氏(フランス)が提唱し第1回日米欧財界人円卓会議が'86年8月にスイス・コーのマウンテンハウスで開催され、本年、第5回目を迎えた。

一、ECバンゲマン副委員長他と意見交換

第五回コー円卓会議（日米欧財界人円卓会議）は七月二十三日から二十五日にかけて開催された。本年はコーでの会議に先がけて、ヨーロッパにおける初のキャンペーンともいえるEC幹部との会議がEC本部（ベルギー）で行われた。円卓会議メンバーであるリチャード・バーク元EC副委員長のアレンジによるものである。

EC側はマルチン・バンゲマン副委員長（元西ドイツ蔵相）、レイ・マクシャリー委員（ウルグアイ・ラウンド、農業問題担当）、トーマス・ガーベイ東欧経済再建援助プログラム委員長の三人が交代で出席し、二時間十五分にわたって円卓会議メンバーとの対話を行った。

EC側の主な発言は以下の通りである。

【バンゲマン副委員長】

新しい経済秩序の必要性が開発途上国側から叫ばれて久しいが、それは市場中心の秩序であるべきである。しかし、市場経済だけに任せては自壊してしまうので、政治的枠組みが必要とされる。GATT、IMF、世銀などの国際機関による調整では直接的な影響力の行使が難しく、そこに地域協力の意味がある。最もまとまりのある地域協力がECであり、ASEANはまだ関税同盟の初期の段階にすぎない。ECは国境を克服し、各加盟国の秩序とは異なる秩序を形成しつつある。共同市場の成功をテコに通貨統合ばかりか、最近では政治統合の可能性すら論議にのぼっている。

東欧の民主化は二つの欧州の終焉、一つの欧州の誕生を意味するが、排他的になることが危険である。東欧の開放はスピードを上げているが、新しい加盟国として受け入れる前にEC内の政治的枠組みを固める必要がある。EFTA（欧州自由貿易連合）の方は加盟国を増やすという方針に対して、EC加盟諸国の方は単なる自由貿易圏になるのではなく、あくまでも共同市場を維持するという方針である。

ドイツの通貨統合に対してドイツが強大になり過ぎるという脅威論があったが、これは英国のリドリー蔵相のいう民族国家同士による力の均衡論に立脚したものである。ヨーロッパは民族主権国家の概念を既に克服して共同体になっており、加盟国が強くなることは全体にとっての利益である。東ドイツの労働者はレベルも高く、外部からの投資さえあれば五年以内にECのレベルまで到達するだろう。

政治統合とは各国の外交政策をまとめようとするものである。各国国民が固有の文化やアイデンティティを維持する一方で、同じヨーロッパ人として一緒に世界に貢献しようとするものである。

【マクシャリー委員】

共通農業政策（CAP）は三十年にわたって適正価格の食糧の供給と

●ECバンゲマン副委員長(右から三人目)他と会談するコー円卓会議一行。EC閣僚理事会室が特別にあてられた

農民の収入確保を目指して進めてきた。これがうまく行き過ぎ生産過剰になっており改革が迫られている。ガットにおいてこのCAPが障害になっており、特にアメリカは補助金政策を批判しているが、アメリカの農業価格保護はECの二倍半にものぼる。

各国の農業条件がまるで異なるので、何が自国にとっていいかではなくて、何がEC全体にとっていいかで考えるべきである。

【ガーベイ委員長】

東欧経済再建援助プログラム（PHARE）は元々ポーランドとハンガリー両国が対象であったが、現在ではソ連を除く東欧全体に枠が広がっている。一九九十年に五億ECU（欧州通貨単位）、一九九一年に六億ECU、一九九二年に十億ECUがそれぞれ拠出される。二十四ヶ国の参加により設置され、市場アクセス、特恵関税、障壁撤廃、貿易収支改善などの分野から支援を図ろうというものである。東欧用の銀行も創設され、技術協力も行われている。

東欧の問題は三つある。

①資産評価、金融、税務、経理などに信頼できる尺度や法体系が存在しない。②ビジネスにも行政にもマネジメントが欠如。③購買力と安定通貨がないため市場が育たない。

初期の段階ではセクター別の戦略が重要である。農業、中小民間企業の創設、民間住宅建設などが重要である。民営化に伴う構造的失業が多く救済策が必要である。環境汚染も限界を超えており優先的対応が迫られている。

二、健全な競走と協調

コーに移動して行われた第五回円卓会議の第一セッションは「日米欧間の期待の高まりに伴って必要とされる新しい態度と行動」というテーマで行われた。冒頭では四月の東京会議で日本側が発表した日本改革案「真に世界に貢献できる日本を築くために」に対する高い評価が欧米から寄せられた。続いてフェアなルールに則って健全な競争を推進しようというアメリカ側の提案に対して、日米欧の参加者は自国における構造改革や社会問題解決への取り組みの重要性を訴えた。日本の成長やドイツ統合に関する恐れや嫉妬に対しては、成長を抑制するよりも、富を作る方法を発展途上国や東欧に伝えていくべきだとの意見も出た。

また先進国間では全て競争で解決できても途上国ではそれについていけない。国益ばかりでなく地球全体の利益を重視するような考え方、数世代先のことを念頭においた行動、そして環境問題への国際的対応の必要なども説かれた。

しかし、日本企業三社がダンピングで罰金を受けたというドイツの記事に話題が及ぶと途端に活発な意見交換に発展した。ダンピングを意図してやっているメーカーはなくとも、流通その他の要因で実際には海外価格の方が安いことがダンピングとして受けとられていることが共通の認識としてあげられた。これを法律的対応以外で調整できる方法を見出すべきだとの提案に対し、日本のある参加者は、こうしたことをはっきり説明できる透明性と相互主義を確立しなければ日本は欧米ばかりか第三世界からも非難を受け続けるだろうと述べた。

また日本の海外直接投資や買収のやり方に関する批判に対して、別の日本人参加者は自分の会社の方針として企業買収はしない、株も四十九%以上は取得しない、相手企業の企業文化を尊重する方針を貫いていると答えた。これに対してヨーロッパ側の参加者は、付加価値や研究開発を含む日本からの投資でできた製品は〝ヨーロッパ製品〟であり、アメリカからの投資を長年受け入れてきたように日本からの投資も等しく歓迎すべきであると主張した。

三、ペレストロイカに必要な西側の投資と経営教育

第二セッションはソ連科学アカデミー・システム研究所グビシアニ所長をゲストに迎え「ソ連・東欧の変革―その影響と好機」というテーマで行われた。コスイギン元首相の女婿にあたる同博士は長年多くの国際会議に出席し東西交流に尽くしてきた。発言の概要は以下の通りである。

「東欧の劇的民主化が目に見える結果をもたらすには時間がかかる。計画経済から市場経済に移行するにはインフレや不況が起こるが、政治的自由を得た代償としてのこうした困難に市民がどこまで耐えられるかが鍵である。経済構造変革には西側企業の助けが不可欠である。このままでは貧富の差が広がり、貧しさの中での社会分裂が起こりかねない。鉄のカーテンの向こうで対立が起き、欧州の$\frac{2}{3}$が豊かで$\frac{1}{3}$が貧しいのでは欧州全体の安定はありえない。経済的安定が、これまでの軍事的安定に

とって代わらねばならない。但し、ゴールドラッシュのような気持で来ては欲しくない。忍耐をもって来てもらえば将来魅力的なビジネスチャンスが与えられよう。フィージビリティースタディも可能だし、外資の持株上限が四十九％から九十五％まであがっているので合弁がし易くなった。充分とはいえないがリスクがつきもののビジネスとすればかなり良い条件になっている。改革の勢いが是非とも欲しい今こそ西側の投資と経営教育が緊急を要する。改革のプロセスが後戻りすることはないが、ペレストロイカを成功させるためには全世界の協力がいる」。

欧米の参加者からは「社会主義から資本主義へ移行する過程で、人の態度を変えることを助けることが重要」、「ペレストロイカの失敗は破産につながり世界全体の問題」、「東欧支援は我々にとっても自己利益」といった意見や日本からの東欧支援を求める意見も出た。これに対して、北方領土の問題が日ソ関係改善の障害になっているという歴史的経緯を日本人参加者が率直に説明すると、日本人の生の気持を初めて聞くことができたと博士は答えた。

世界銀行の関係機関である多数国間投資保証機関（MIGA）の寺澤長官は、MIGAが九月にハンガリーで外国企業の投資促進セミナーを開催することを紹介した。同国の企業民営化を外資導入により後押しするのが目的で東欧では初の試みである。「魚を与えるよりも、魚の釣り方を教える」という理念で民間による投資のリスクを保証することによって途上国への投資を促進するもので、円卓会議でも多くの関心を集めた。

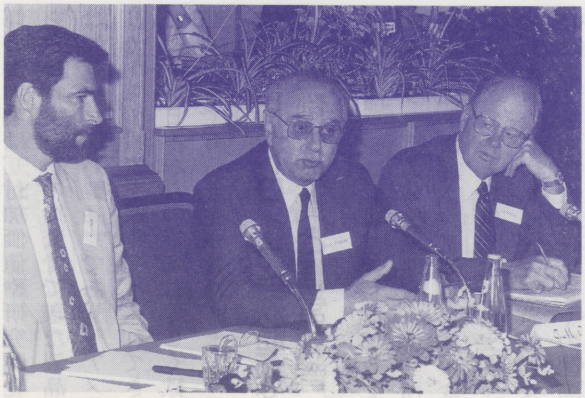
四、社会変革のエンジンとしてのビジネスの役割

第三セッションはジャパン・タイムズ小笠原会長の司会で「環太平洋―世界的な好機」というテーマで開かれた。今では世界貿易の二十五％を占める環太平洋地域は世界で最も投資環境が良いこと、日本が中国を孤立化させない姿勢をとっていること、中国と台湾との経済交流の拡大など政治と経済の軸が一致してきている動きなどが紹介された。またビジネスの役割や倫理についても多くの意見が出され、政治体制の違いを超えたビジネス交流による対立の抑止、人の動機づけの推進、国や政治家に代わって社会変革のエンジンたるべきビジネスの役割、軍縮による産業振興などが挙げられた。

日本の[illegible]地域におけるプレゼンスの大きさや進出の在り方について警戒する発言もあった。これに対して日本側参加者からは、①短期的見返りを求めない長期的視野で進出し、現地の人に任せてその国の産業を一緒に興すようにしている。②先ずアジアからの留学生や難民を受け入れて喜んでもらうことや、労働市場の開放などをして、アジアの人から尊敬されるような日本社会や日本のビジネスマンになることが先決。③外国人を本社の重役に迎えるなどの動きが始まっている。といった具体対応が紹介された。

第四セッションはインドのパトディア元商工会議所会頭をゲストに迎え「発展途上国に対する共同責任」というテーマで行われた。同氏は世界全体が市場経済に移行しつつあるにも拘らず、繁栄が均衡して配分されずに格差が拡大していると指摘した上で、世界全体の協力と調和という観点から競争の概念を再定義する必要があると述べた。そして債務、インフレ、人口増加、環境汚染といった問題解決に日米欧の経済人の協力を要請した。欧米参加者からは、先進国と途上国の架け橋としてのインドが、他の第三世界諸国[illegible]展に大きな役割を果たすことができるとの期待が表明された。

こうして、これまでにない幅広いテーマをこなした今回の円卓会議は終了したが、ますますグローバル化する問題や緊張に対して一緒に取り組もうという姿勢が一層明確になった。コー円卓会議は、その理念とアプローチを各国の政策や世論にも反映させようとの試みから、来年四月にアメリカのワシントン市とミネソタ州を訪問することが決まった他、来年初めに小グループでインドのニューデリーを訪問してほしいとの要請がインドの政財界から寄せられている。（参加者リストは10ページ掲載）



●ソ連の改革と今後の課題について率直な発表を行ったソ連科学アカデミー・システム研究所グビシアニ所長（中央）

産経新聞
7 経済 15版 平成2年(1990年) 7月29日 日曜日

◇◇◇コー円卓会議に溢れる信頼と譲り合いの精神◇◇◇

多数国間投資保証機関(MIGA)長官、寺澤芳男氏、円卓会議の印象を産経新聞で語る

平成二年七月二十九日朝刊

経済時評

「アダム・スミスの「信頼」」

多数国間投資保証機関長官 寺沢 芳男

東欧支援の〝輪〟

アメリカには十八年間住んでいるが、ヨーロッパには一度も住んだことはない。生涯、二、三年ロンドンかパリの勤務があったらと熱望していたが、とうとう実現しなかった。

ヨーロッパに来るごとに、見るもの聞くものがものめずらしく、新鮮で、私の知的好奇心を満足させてくれる。

いま、スイスのコーで円卓会議が開かれている。ジャーナリストだったら「激動のヨーロッパ」と大げさに言うだろうが、たしかにヨーロッパは信じられない速度で「ひとつになろう」としている。

レマン湖を見下ろす標高千㍍の山のてっぺんにあるマウンテン・ハウスに、日本、アメリカ、ヨーロッパの主にビジネスマンが約二十人集まって、自由に言いたい放題のことを言い、「人類の未来」について糸口を探っていこうという。

「ムキにならないで静かに語り合いましょう」と司会者は最初にクギをさすが、東欧やソ連の問題になると、が然討論はホットになる。

市場経済への大変換をなしとげようとしている東欧。一九一七年の革命以来初めて共産党独裁から脱皮したソ連。あっという間に壁がくずされ、通貨の統一が実施されたドイツ。あと千日以内に統一にこぎつけようとするECの十二カ国。

どれ一つとり出しても、歴史の大変革が一度に起こったのだから「いったいどうなる」と首をかしげたくなるのも当然だ。

え・脇 まさひで

日本、アメリカ、ドイツ、フランス、オランダ、スイス、スウェーデン、英国、インド。そして今回初めてゲストとしてソ連から参加した人たちは、「市場経済を信じるビジネスマンとして、長年計画経済で苦しめられたあげく、やっとわれわれの仲間入りを表明した東欧の人たちを助けようではないか」という点で、全く同じ考えをもっている。それが分かっただけでも大きな収穫だった。

200年目の日の目

七月十七日はアダム・スミスが死亡してちょうど二百年にあたる記念日であった。欧米のマスコミはあらゆる角度から「アダム・スミス論」をとり上げた。自由主義経済学を説いた「富国論」がやっと死後二百年で日の目を見たからであろう。

十年前、カリフォルニアからやって来た元映画スターの新大統領ロナルド・レーガンが「スモール・ガバメント」を標ぼうしたとき、ワシントンではアダム・スミスの横顔がデザインされたネクタイが流行した。十年後のいま、モスクワやワルシャワでも若者のTシャツに同じデザインがはやりだしたと「ロンドン・エコノミスト」は報じている。

グラスゴー大学出身のスコットランド人とコーで会った。

「アダム・スミスは〝富国論〟で有名になったけれど、そもそもはグラスゴー大学で道徳学を教えていた。彼の最初の著書は〝倫理感情の理論〟(セオリー・オブ・モラル・センチメント)です」と強調する。

シュンペーターは、「〝富国論〟は経済学の新しい理論ではない。今まで百科事典のように散らばっていた見識・知識・情報を蒸留し、それを革命的なドクトリンにまとめ上げたものである」と看破したと言う。

譲り合う精神で

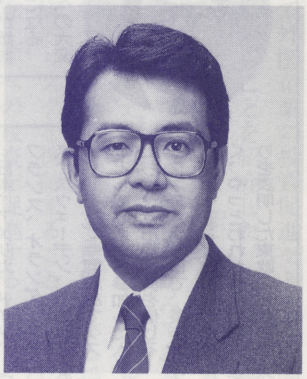
それはともかく、私の独断と偏見だが、アダム・スミスは基本的に人間を信じていたのだと思う。政府などはなるべく小さい方がよい。いちいち行政指導などしなくても、マーケットでは信頼できる供給者と需要者とのフェアな競争が行われ、価格はしかるべきところで決まる。道徳を教えていた先生として彼はそう信じていた。

いまコー円卓会議で参加者が自由に意見が述べられるのも、この「信頼」があればこそである。

日米間のゴタゴタも、もっと思い切って相手を信頼し、譲り合う精神でやり直したらどうなのだろう。日本だけが世界の潮流からポツンとり残されないだろうかとあせりを感じる。

地球市民としての在り方を学んだコーでの十日間

武蔵野市市議会議員
深沢　達也



"I want to be a citizen of the world"前後の文脈を加えると「私は自国の一国民という枠を超え、地球市民としてやって行きたい」。

コーで親しくなったブルガリアの青年が別れ際に言い残したこの言葉が、色々の意味で余りにも象徴的で頭から離れない。

澄みきった天空に高く連なるスイスアルプスを背景に、清き水を湛えるレマン湖を見渡す身も心も洗われるような環境の中にあるコーのマウンテンハウスを舞台に、世界の友人たちと語り合った十日間は私にとって単に貴重な体験だったというだけでなく、今後の私の活動に少なからぬ影響と指針を与えてくれた。

私はこの夏、思い切って一ヵ月半の長期休暇を取り、地元を家内に任せ訪欧の旅に出た。コーMRA世界大会参加からスタートしたことで、その後の欧州各国訪問ではコーで私自身が考えたことが、物事を見る上での一つの座標軸になったことは事実だ。

私が止むに止まれず欧州見聞の旅に出た理由の一つは、言うまでもなくベルリンの壁崩壊に象徴されるダイナミックな世界の変化を現場で確かめたかったからだ。

コーでの各種会議の全体テーマ「様々な変革の動きを活かすために」(Freeing the forces of change)は私のテーマとも合致し、特にソ連、東欧からの参加者の話を聞き、ヒザを交えて語りあえたことは私にとって実り多いものであった。

以下私の感想を列挙してみたいと思うが、これまで述べた事柄の性格上、コーでの体験に留まらず、これと連動するその後の訪欧で受けた印象も含まれている。

また前提として私がコーで参加した会議は、

一、産業人会議　テーマ「国際競争の激化と、望まれる質と動機」

グループディスカッションで私の属したグループのテーマは「労働組合の役割」であった。

一、第五回コー円卓会議

会議はこれまで四回行われテーマは各々設定された。今回のテーマは私流に要約すれば、日米欧の経済競争の在り方、ソ連、東欧の変革への対応、発展途上国への対応等であった。

以上、参加メンバーは日米欧を代表する企業のトップで、私はオブザーバーとして参加させていただいた。

①　ソ連、東欧の経済破綻と自由市場(free market)を求める声の強さを実感

産業人会議、円卓会議を通じソ連の代表的な学者二名が各々講演を行った。

私が大きな変化を痛感した第一は、二人ともソ連のこれまでのやり方を自由に批判し、これからの在り方を自由に論じていたことだ。まさに鉄の統制が崩れる音を聞く思いであった。第二はその在り方として西側(既に東も西もないと思うが)とも手を組んで市場経済のシステムを導入していきたいという点で、この点は東欧諸国の人たちも同感のようであった。本文冒頭に登場してもらったブルガリアの青年も「我々は自由市場を望んでいる」と強調していたし、ポーランドで新党結成に参加したという若い女性もニュアンスの違いはあるにせよ、統制や計画によらない自由な経済運営を取り入れたいと訴えていた。

後の二人の発言は各々食事を一緒にした時のものだが、私は明らかに一般市民レベルまでそうした変化が浸透していることを知った。

ソ連の学者からのこうした論述に対し、日米欧皆で助けていこうでは

●まだ残っていたベルリンの壁の前で

ないかと円卓会議の意気も上がり、私も末端の席でそれを聞きながら円卓会議の精神に心の中で拍手を送った。国際政治、特に国家間の問題では譲れるものと譲れないものの一線はあるとは思うが、助け合えることは大いにやるべしとの思いを改めて実感した。

② 民族自決を外から邪魔することはできない

東西ドイツ統一の日程も決まったようだ。私が今回の訪欧で確信したことは、ドイツ民族は様々な困難を乗り越えて名実伴った統一を達成するだろうということだ。

円卓会議で西ドイツの経営者が、「我々はいいことは早くやるんだ、統一の実現に向けて急いでいるんだ！」と熱情を以て力説し満場の拍手を浴びていたが、私はそれをドイツ民族の意見を代表するものとして受け止めた。

コーの後、東西ベルリンを初めドイツ各市を訪ねたが、列車の中で隣合わせた若者や学生と話をしたり行く先々で老若男女問わずドイツ人から話を聞いた限り、東西ドイツ統一はドイツ民族の悲願であり、それに伴う困難は自分たちの手で乗り越えられると彼らは確信しているというのが私の受けた印象であり、これから起こるであろう東側での失業問題や物価高騰など経済混乱を軸にした様々な課題についても皆承知の上で、これらを受けて立つ気構えが見られた。

考えてみれば、色々ないきさつはあったにしても同一民族が二つに別れていたのだから一緒になることを望むのは人間として自然の感情といえよう。

翻って私たち日本人は同一民族一国家で誠に幸福だが、同じアジアにはカンボジア、東チモールなど不幸な国々が残されている。過去のいきさつからも日本がこれらの国々に対し打算抜きでやるべきことをやるべきである。MRA関係者がカンボジアの真正の独立のために尽力されていることに敬意を表すると共にその実現を日本人として願うものである。

③ 土地問題の解決と社会資本の整備が直面する日本の課題と実感

円卓会議の第一部「日米欧間の期待の高まりに伴って必要とされる新しい態度と行動」では、日本企業の海外での経済行動が早速争点となり、ヨーロッパ側メンバーから日本はやり過ぎではないかとの批判が相次ぎ、米国側が間に入り自由競争という立場からむしろ日本に理解を示す発言をするという議論の流れがあり、私は深い関心を以てそれを聞いた。

ヨーロッパ側が指摘したことは、一つには日本のある電機メーカ！のダンピングが倫理的に許せないという点、もう一つはドイツの経営者からで、日本はホテルなどを買い占めているというものだった。一つめの点については日本側から、指摘された件はダンピングにはあたらないという主旨で然るべき答えが返された。また後の点は米国側が間に入り、売る人があるから買うのであって悪いことではないと日本を庇った。

私の正直な感想を言えば、お互いの自由競争なのだから、そのルールに則って行動する限り、安くていいものを売る方が勝つわけだし、なによりも消費者の利便にも供することができる。同時に思ったのは、日本人が勤勉で貯蓄をし、よく働くことに何故こんなに文句を言われなければならないのかということで、その晩は色々と考え込み眠れなかった。

結局、日本の経済成長の在り方を問い直せばGNP(国民総生産)は増大したが、国民一人ひとりの生活が豊かなものになったと断言できるかという点に思い当たるわけで、東京を中心とした異常な地価の高騰、貧困な住宅事情、また地域差はあるが道路、下水道、公園といった街づくりの基本である社会資本整備の遅れを考えると、欧米から見れば日本の経済発展は足元暗しの感を抱かせるのではないかという点に思い当たる。同時にこの点は、現在日本の政治(内政)にとってもその解決を迫られている国民的課題であり、その実現のために最大の努力をすると共に、国際社会の中で存在する日本という視点からも、これからの経済発展の在り方を国民全体で考える時だと痛感した次第である。

私が議員をつとめる武蔵野市では昭和三十年代から下水道建設を急ぎ、今では道路、公園を含め遜色なき水準まで整備されてきたが、量と共に質の充実をはかるため今後更に尽力したいと考えている。

④ 地球環境問題が世界の課題

前記の点と共に先進国の経済発展は環境の犠牲の上に成り立ってきたという問題の指摘があり、円卓会議のメンバーことごとくこれを認めると共にこれからの課題として手を携えて取り組んでいこうという結論になった。

私も全く同感であり、これまでの数値で代表されるGNPという物差

しから真の豊かさ、個人個人の豊かさの追求と地球環境の保全という立場からの物差しに転換すべしの思想が共有できたことは幸いであった。

私も地域においてリサイクル活動やエコロジー（生態系）を重視した街づくりに取り組んでいるが、これに尚一層尽力したいと考えた。

⑤ 日本人としての正しい自尊心をもって国際社会に臨むべし

本文冒頭で地球市民という言葉が出たが、私自身は日本人でありその上で地球市民であると認識している。コーではクッキングのチームに入り各国の人たちと一緒に働き、余暇も色々な会談をしたが、必ず話題になったのが自国の紹介であった。勿論英語で話す訳だが、こうした時、自分の国を真正のプライドをもって正しく披露できることが国際社会の一員としての基本条件であると思う。

私は議員で文教委員を長く務め、この点を指摘してきたが、これからも何度でも繰り返して言うつもりである。

以上思いつくままに書いたが、日本が日本だけで存立しえない、国際社会の中で生きていかなければならない時代であるだけに、MRAに大きな存在価値を認める次第である。

第五回コー円卓会議参加者リスト

■ヨーロッパ

フレデリック・フィリップス夫妻（オランダ）
フィリップス社元会長

クルト・シップス夫妻（西ドイツ）
ロバート・ボッシュ社監査役会役員

フレデリッヒ・ショック夫妻（西ドイツ）
ショック社社長

ラインハルド・フィッシャー夫妻（西ドイツ）
ブランコ社社長

オリビア・ジスカールデスタン（フランス）
ヨーロッパ経営大学院副理事長

モリス・アミール（フランス）

ティムケン・ヨーロッパ・アフリカ・西アジア社長

ネビル・クーパー夫妻（イギリス）
トップマネージメント・パートナーシップ会長

ピーター・フグラー夫妻（スイス）
インターアリアンス銀行頭取

アクセル・イベロート（スウェーデン）
アドバンスト・インターナショナル・マネジメント会長

リチャード・バーク（アイルランド）
元EC副委員長

■アメリカ

リナルド・ブルトーコ
（トランソン社社長 ワールド・ビジネスアカデミー代表）

ジョン・デイロン夫妻
（ベクテルグループ取締役）

ボイト・ギルモア（アメリカ旅行業協会会長）

アレックス・グッドウィン夫妻
（アルフレッド・チェッチ社社長）

ジェイムズ・ハウエル夫妻
（スタンフォード・ビジネススクール教授）

ベン・マンチニ夫妻
（BBHクオリファイド・ブランズ社長）

ジェイムズ・モンゴメリー
（アース＆スペース社会長）

バイロン・ネーサー
（フランク・ネーサー・アドバタイジング社長）

ロナルド・ネーター夫妻
（経営コンサルタント 前SRIインターナショナル専務理事）

フランシス・スタンカード
（チェイスマンハッタン銀行副頭取）

■日本

伊藤　新（鐘紡欧州主管）

小笠原敏晶夫妻
（ジャパンタイムズ会長、ニフコ社長）

賀来龍三郎（キヤノン会長）

阪本　勇（住友電気工業相談役）

寺澤芳男夫妻
（多数国間投資保証機関【MIGA】長官）

御手洗富士夫（キヤノン専務取締役）

金子保久（松下電器国際関係部長）

「MRAの歴史」のビデオ（ベータ VHS）
頒布中
頒価2,000円（送料込）
詳しくは事務局までお問い合せ下さい。
03(821)3737

日本に寄せられる世界の期待にどう応えるか

―産業人会議に参加して―

近畿日本鉄道株式会社
取締役
辻井　昭雄

私は、七月十八日から四日間、スイスのコーで開かれた産業人会議に労働組合の上田委員長と二人で出席し、全体会議で意見発表をするなど、充実した日々を過ごした。

併せてこの間、全くのノン・アルコール・デーを実行した。近年一日たりとも酒を断ったことのない私たちにとって、誠に有意義であったと自賛している。

コー滞在中は、事務局のご配慮によって私たちの朝食のテーブルでは、毎回、異なった国々の人たちと懇談する機会をアレンジしていただいた。ポーランドのジャーナリスト、南アフリカやジンバブエのMRA活動家、イギリスのコンサルタント会社の代表、レバノンの大学教授などである。いずれの人たちも日本について、時には私たち以上によく知っており、また、その動向に並々ならぬ関心を示していた。

テーブルでの会話はいつも楽しかったが、とりわけ南アフリカのMRA活動家との対話は印象に残っている。彼は私の名刺を受け取りながら自分は貧しいので名刺を作っていないと断っていたが、後でそれ程までに節約してコーに来る旅費を貯めていたことを知って感動した。

彼はとても陽気な人物であったので、私は「我社では管理職を選ぶ時の条件の一つを性格的にネアカであることにしている。その意味で、貴男のような人物は最適だ」と言うと、それは大変有り難いが、その際にはワイフの許可を得なければ呵呵大笑した。

さて、全体会議でのスピーチやフォーラムでの討論を聞いていると、必ずといってよいほど、日本に関する話題が含まれていた。

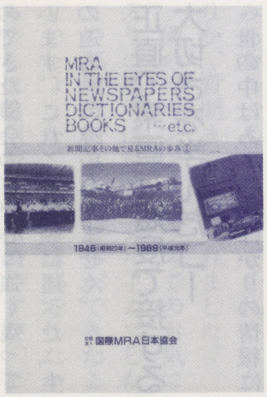
例えば、ポーランドの婦人労働者は、日本のマネージャーは労働者の意見を尊重すると聞いているが、自国の管理者は、労働者がせっかく良い提案をしてもそれを全く無視してしまうので大変残念だと言っていたし、イギリスの労働者は、日本の企業は顧客を大切にし、また、部品供給業者の面倒見もよく、これが日本企業繁栄の原動力になっており、イギリス人も大いに学ばなければならないと褒めてくれるといった具合である。

今年の会議には、東ヨーロッパの人たちが多数参加していた。彼らはあらゆるミーティングに顔を出し、真剣に耳を傾け積極的に発言していた。彼らを含めた世界中の人たちが、日本の援助、投資、経営指導など色々な面で期待を寄せていることを直接肌で感じることができたのも、大きな収獲であったと思っている。そして、私たちは彼らの期待に、どうすれば実りある対応ができるか、真摯に考えねばならないと痛感した。

新しい出版物のお知らせ

新聞記事その他で見るMRAの歩み①

1948（昭和23年）～1989（平成元年）



（内容の一部）

- ●片山哲氏海外通信第一報　世界平和の青い鳥MRA大会に期待
- ●日韓問題解決へ糸口　MRA大会で両国代表瀬踏み交渉
- ●企業に浸透するMRA活動　東芝　国際会議に毎回参加
- ●「GIFの基本理念とMRA」　中島正樹

◇非売品ですがご希望の方に一部300円（実費）でお頒けいたします。
お申し込みはMRA事務局へどうぞ　TEL：03(821)3737

激動する世界の動きを肌で感じたコーでの生活

大妻女子短期大学
下崎　京子

不安な気持で参加したコー世界大会

「百聞は一見にしかず」とことわざにあるように、何においても「生の迫力」に勝るものはないと思います。私は映画も大好きですが、それよりもミュージカルや舞台の方に圧倒的な迫力を感じますし、音楽にしてもレコードやコンパクトディスクよりコンサートの方がより感動します。その理由は、何も手を加えられていない、飾りのない新鮮な、そして嘘偽りのない真実が伝わってくるということ、さらに演技や演奏をしている本人の生き生きとした表情や感情―喜怒哀楽―を手にとるように感じることができるからです。

今夏、MRAコー世界大会に参加し、貴重な二十日間を体験することができました。出発前は初めての海外旅行という不安も手伝って、英語もろくに話せない自分が外国の人とうまくやっていけるだろうかと何もかもが心配で仕方がありませんでした。

忘れられないルーマニアの青年との対話

何はともあれ、マウンテンハウスでの生活が始まりました。様々な人種、言語、生活様式、幅広い年代層などに一気にカルチャーショックを受けてしまった私には、毎日が驚きの連続でした。日が経つにつれて自分の英語力不足が目立ち始め、言いたいことの半分も言えない自分が腹立たしく感じる場面が数多くありましたが、それでもマウンテンハウスでの生活は楽しく、クッキングチームに入って料理を手伝ったり、パーティーその他の催し物などに参加しているうちに本当にあっという間に一日が過ぎてしまう感じでした。

マウンテンハウスに来ている人々はみんな熱心で、会議以外の、例えば食事の時でもお互いの国の抱えている問題を話し合ったり相手の国に関する質問などをしていました。今までテレビや新聞などでしか知らなかった様々な社会問題がまさに現実のこととして目の前で明らかになっていくのです。

中でも特にルーマニアの青年の話が今でも忘れられません。私はこれまでの報道からルーマニアは自由化されたのだと勝手に思い込んでいたのですが、実際には何も変わっていないのだと彼は言いました。そして「ルーマニア製の楽器は重くて使いにくい上に値段が高くて買えない」と真剣な表情で言った時、私の心に何かずしんとくるものがありました。「自分は心の底から本当に辛いんだ」という彼の気持ちが伝わってきたのです。私は何と返事したらいいのか分かりませんでした。もちろん私の英語力不足もありましたが、この様な場面にふさわしい言葉が見つからず、結局は黙り込むしかありませんでした。

毎日のように開かれた会議で耳にした話からいろいろと考えさせられることもありましたが、やはりこのようなお互いに率直に話し合うことのできた機会の方が心に強く残っています。これこそ冒頭に述べた「生の迫力」に違いありません。

正直で素直な態度で接する大切さを学んだコー

世の中はあふれんばかりの情報に満ち、昨日、いやたった今起きたばかりの国内外の出来事さえ知ることができます。ただ、それらは通常私たちにとって一つの出来事、世間の常識でしかなく、国内のことならまだしも外国で起こったこととなるとブラウン管、スピーカー、紙面から伝わった「海外の出来事」として終わってしまいます。つまり、心のどこかで「他人事」と思ってしまう気持ちがあるのだと思います。今回、マウンテンハウスでいろいろな話を聞いて、自分の目、耳で直に真実に触れる思いでした。

マウンテンハウスで学んだことは非常に大きかったと思います。これから将来を選択していく上でも生活をしていく上でも様々な出来事が起こると思いますが、大切なことは、どの様な場面においても、他人、そして自分自身を偽ることなく、正直で素直な考え方や態度で接することであるということを、この二十日間で学んだと思います。

青年主催会議参加レポート

■テーマ：「新しいヨーロッパの形成をめざして」
■期　間：1990年7月29日～8月5日

未来を担う世界の若者たちの交流、意見交換の場として毎年開催されているこの会議は、セミナー、グループディスカッション、スポーツ、音楽や劇の鑑賞、料理、給仕などの多彩なプログラムで構成されている。今年は昨年来の東欧改革の動きを受けて、ヨーロッパの将来が重点的に話し合われた。日本からは関西日本・スイス協会から派遣された6名の中学生が参加した。

「固くて真面目な」マウンテンハウス？

塚本　真由子
（今市中学校３年）

私はこの夏、初めてコーＭＲＡ世界大会に参加しました。三日間というとても短い期間でしたが、一日一日が楽しく充実した日を送ることができました。

行く前は期待と共に不安もありましたが、着いた途端に不安の方は吹っ飛んでしまいました。マウンテンハウスは私が考えていたような「固くて真面目」な場所ではなかったからです。何か聞かれて答えられなかったらどうしようと心配していたのですが、そんなに緊張する必要はありませんでした。話合いの場では色々な問題についてみんなで真剣に考え、討論していましたが、自由時間や食事の時間には以前から知っている友人のように、明るく楽しくおしゃべりすることができました。

コーには色々な国から沢山の人が来ていました。私はまずその人たちと友だちになるということを決めました。言葉が十分ではありませんがそれでも身振り手振りで何とか伝わった時はとてもうれしく、また自信がつきました。コーに来ている人たちはみんな何か目的意識を持って来ているんだと感じました。友人を作りたい、自分の悩みを話したい、人から色々な考えを学びたい、そんな人たちが沢山いました。

今回は東欧の人が多かったそうですが、東欧といえば今、大きく変化しつつあるところです。私は、東欧に関する分科会で色々な立場の人から話を聞くことができました。どの話も興味深く、新聞や本から得る知識よりも新鮮で相手の心も伝わってくるようでした。このような人たちとも友人になれるのも、ＭＲＡならではのことだと思います。

私たちは日本の歌を紹介したり、夕食作りを手伝ったりしました。日本の歌の時、私はピアノで伴奏をしました。後で沢山の人から「良かったよ」と声をかけられとてもうれしく思いました。また夕食作りでは、二十人程で七百人分もの夕食を作らなければなりませんでした。大忙しでしたが、とても楽しい思い出になりました。

沢山の人と交流し、考えを互いに交換し友人になれるＭＲＡ世界大会に参加できとてもうれしく思います。

友だち

斉藤　太郎
（新東淀中学校３年）

僕はこのコー世界大会に参加して、自分自身の英語力を試すことができました。もちろん初めは通じませんでした。例えば、時間を示す時などは九時三十分を「ハーフ・パスト・ナイン」と、学校で習ったのと少し違う表現なので理解できませんでしたが、紙に書いてようやく通じることがよくありました。また、辞書を持ってきて相手の前で見せたりして何とか自分の意思を伝えられるようになりました。同じ年頃の人に意思が伝わると、もうそれは僕にとっては半分友だちになったようなものでした。それにここに来た人たちはみんなちゃんと応答してくれるばかりか、質問までしてくれました。

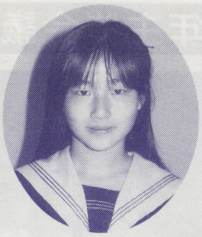
僕のマウンテンハウスでのお気に入りの場所はピンポンルームでした。この部屋で何人の友だちができたことでしょうか。僕は卓球部でしたから少しは自信があったのですが、こ

こでは負けてばかりいました。中にはドイツ語やフランス語しか話せない人もいましたが、卓球に関しては言葉はそんなに関係ありません。

またマウンテンハウスでは、廊下で会うと気軽に声をかけてくれます。日本ではこのような習慣がないので、最初はなかなか慣れませんでしたが、最後のほうでは自分からも挨拶できるようになりました。僕はこんな習慣が日本にあればいいなとつくづく思いました。

僕はマウンテンハウスでできた友だちと、文通を始めたいと思っています。

話すということは相手を知るということ



顔陳 真琴
（木津中学校２年）

マウンテンハウスでは、沢山の国々の人と知り合えます。普段初対面の外国人と話したことのない私でも本当に簡単に話しかけることができ、言葉が通じにくくても、一生懸命に聞いてくれるので私も一生懸命に相手の話を理解しようと努力しました。確かにどうしても分からない時もあり、いくら努力して聞こうとしても分からない自分の英語力の不足がとても悔しかったです。だから今は英語を一生懸命勉強しています。外国語を勉強することの大切さが身に沁みて分かった思いです。

また、沢山の国の人と話すということは、沢山の国のことを知ることができるということです。私も日本のお祭りについて話しましたが、浴衣や太鼓に興味を持ってくれて、話していてとても楽しくてもっと詳しく教えてあげたくなりジェスチャーや絵で説明しました。相手が分かってくれた時はとてもうれしくなりました。その時の気持を今も大切にしています。

マウンテンハウスで得た沢山の体験、そして感じた沢山の気持を大切にしています。日本ではめったに味わうことのできない体験をマウンテンハウスでしました。また今しかできない体験も沢山しました。英語が苦心の末やっと相手に伝わった時の喜びは今しか分からない喜びだと思います。なぜなら、将来英語力がついてから外国人と話しても言いたいことは今よりちゃんと伝わると思うので、うれしいと思う気持も半減すると思うからです。だから今回コーで受けた新鮮な感覚を大切にしていきたいと思います。

マウンテンハウスはとても素晴らしいところだからぜひ沢山の人に行ってもらいたいです。何年後かに必ず行きますから、いつまでもなくならないでほしいと思います。

「積極的に行動する」ことを学ぶ

寺村 由美子
（西中学校２年）

私は七月三十一日から八月二日までコーのマウンテンハウスでMRA国際青年主催会議に参加しました。前日までは「沢山の友だちができるかな、英語がちゃんと通じるかな」と不安で頭が一杯でしたが、早く会議に参加したいという気持も強くなっていました。

このマウンテンハウスでは全員が協力して、料理や食器洗いなどをしていると聞きました。これは、友だちを作るまたとない機会だし、私が実際にこのマウンテンハウスで一緒に過ごしているんだという自分の存在感や一人ひとりの重要性を知るために、大変大きな役目を果たしていると思いました。

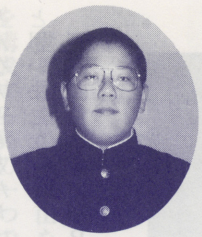
ここでの三日間で私が学んだことは「積極的に行動する」ということです。これは、マウンテンハウスで生活する上で一番大切なことだと思います。なぜなら、英語が苦手だから、恥ずかしいからといって、誰にも声をかけなければいつまでたっても日本人ばかりで固まって、色々な国の色々な人と食事もできないし、ボール遊びがしたくても、一緒に遊ぶことができないからです。だから私は英語は下手ですが一生懸命自分の意思を伝えました。たまに通じないことがありましたが、身振り手振りや色々な手段を使って沢山の人と話をしました。それにマウンテンハウスでは男女や年齢、国籍による違いなど消えてしまったかのように、男の子や私よりお兄さんお姉さんにあたる人、弟や妹にあたる人、アジア人、ヨーロッパ人、アメリカ人というように様々な人と友だちになれました。そして、彼らと過ごした三日間の思い出は、今でもはっきりと覚えているし、十年、二十年たっても決して忘れはしない大切な大切な思い出となりました。

また、会議などで、色々な国の状況、色々な人の意見を聞くことがで

き、世界には様々な考え方があるということを知りました。みんな、それぞれ自分の考えをしっかりと持ち、はきはきと意見を述べる姿に感動し、私は上手に大勢の前で意見を述べることができるだろうかと考えさせられました。

三日間の間に色々なことを体験することができ、友だちも沢山できて、とても楽しかったです。また、機会があればぜひ参加したいと思います。

コーで作った「夏の思い出」



西森　義洋
（田島中学校２年）

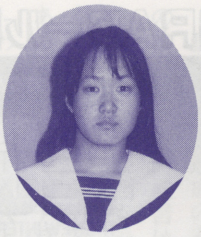
僕はコーで今までにない素晴らしい経験をすることができました。今回の会議のテーマの一つは東欧情勢でした。僕はこの問題には昨年のベルリンの壁崩壊をきっかけに興味を持っていました。分科会では色々な人の経験談を聞きましたが、それは詳しい内容で、例えば東独の改革に取り組んだ人々はどのような心境だったのか、またそれに対して政府の対応はどうだったのか、改革が行われる以前はどのような生活をしていたのかなど今までに知らなかったことも知ることができました。この他にも様々な分科会があり、その中でも「二回嘘をついたために三回目の嘘をつかなければならなくなってしまった」という話が印象に残りました。

このＭＲＡで一番印象に残ったことは、外国の人たちと触れあえたことです。僕は沢山の友だちを作りました。そのきっかけは目が合ったり、卓球をしているところに交じって一緒にゲームをしたりすることからでした。ぎこちない英語を使い何となく分かりあう会話に楽しさと面白さがありました。分からなければ動作を交えたり、単語を並べて話したりしましたが、そのような会話でも充実したものでした。みんなは積極的に話しかけてくれ食事にも誘ってくれました。このような体験で一番感じたことは、たとえ少しの英語しかしゃべれなくともゲームや遊びを通して心は通じあうということでした。

それから「各国の歌」というテーマで色々な国の人が歌や演奏をしました。僕たちは「夏の思い出」と「夢の世界」を歌いました。世界中の人が聞いているので一生懸命歌いました。終わった後には、皆さんが拍手をして下さいました。日本の歌を皆さんに知ってもらえたことを非常にうれしく思いました。良かったよと声をかけて下さる人も何人かいました。

コーで楽しい思い出を沢山作ることができました。これらの体験をこれからの社会生活に役立てたいと思います。ＭＲＡで色々な勉強をしたり外国人と知り合ったことは僕の大切な財産です。素晴らしいＭＲＡ世界大会に必ずまた参加したいと思っています。

協力し、理解しあおうとすれば心は通じる



篠原　多佳
（天王子中学校３年）

今回、コーＭＲＡ国際青年主催会議に参加して特に印象深かったのが東ドイツに関する分科会でした。東ドイツから参加してきた人々が実際の自分たちの体験を話していました。私は、本やニュース、学校の授業でしか知らなかったことを直に聞くことができ、色々な問題について真剣に考え、質問したりしている人たちを見て、とても感動しました。

自分の精神的な面での成長についての発表に、私も参加しました。自分の番が回ってくるまでは、自分の言うことをみんなに理解してもらえるか心配で、かなり上がっていましたが、いったん話し始めると落ち着いて堂々と話すことができたと思います。

人と人との触れ合いも、大きな思い出として心の中に残っています。三日目の昼、私たちはクッキングチームに参加しました。千枚以上の肉に衣をつけたり、レモンやピーチのカッティングなどかなり大変でしたが、自分たちがお互いに力を合わせ

て作ったのでおいしかったです。

また、食事の時や自由時間に、外国の人たちと話す機会が沢山ありました。マウンテンハウスの庭で二～三人でバレーボールをしていたら、いつの間にか大きな輪に広がっていたこともあります。食事の時、全然知らない人に「メイ・アイ・ジョイン・ユー？」（ご一緒して宜しいですか）と声をかけて、友だちになってしまったこともあります。ここでは、どんな人とも友だちになれるんだなと思いました。

正直に言って、MRAに参加する前は見知らぬ外国の人々と友だちになれるか心配でしたが、実際参加してみるとその心配は消えていきました。たとえ下手な英語でも、ジェスチャーを交えてでも、相手を理解し、自分のことも理解してもらおうとすれば通じました。

私はMRAに参加して、言葉の通じない見知らぬ人とでも、お互いに協力し理解しあおうとすれば心は通じるものだということを知りました。こんな当たり前だけれど大切なことに気付かせてくれたMRA世界大会にまた参加したいと思います。

●8月1日のスイス・ナショナルデーを祝う式典にはホルンも登場もした

●大きな人の輪が広がった中庭でのバレーボール

MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

FOR A CHANGE

THE NEW INTERNATIONAL MONTHLY MAGAZINE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

世界中で起こっている変革(チェンジ)と
それを担う人たちのイニシアチブを！

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間11回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、年齢を明記の上、ご希望の定期購読料（3ヵ月分＝¥1,000　1年分＝¥4,000 ※共に郵送料込み）を郵便振替（口座番号：東京8-38289）、又は現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

MRAワールドニュース

●世界のMRA最近の動き

パプアニューギニア

ブーゲンビル島問題解決にMRAが支援

―ナラコビ法相の要請に応える―

世界屈指の銅鉱山を有するブーゲンビル島はパプアニューギニア(PNG)を構成する島の一つである。豪資本の銅山開発公社による環境破壊の補償を求める島民の抗議行動がきっかけでPNG政府に対する反乱が起こり、過去二十ヶ月にわたって死者百人をこえる険悪な事態が続く憎悪の島と化した。

鉱山も強制的に閉山され、反乱側は去る五月十七日にブーゲンビル島の一方的独立を宣言した。怒ったPNG政府は一切の公共サービス(電力・食料・医療・金融・学校等)を停止し、十六万島民の生活は重大な危機に瀕した。

PNG政府のナラコビ法相は事態の重大さに心を痛め、解決の糸口を求めて旧知のMRAの友人に精神的アドバイザーとして支援を要請した。大臣は青年弁護士として活躍していた七十年代にMRAに出会い、スイス・コーのマウンテンハウスにも行ったことがある。また、オーストラリアのシドニーで昨年末に開かれたMRA会議では開会を宣言した。

七月二十九日から八月五日まで、政府側と反乱側との交渉がニュージーランド政府の派遣した海軍巡船エンデバーを会場にして行われることになった。翌々日の一回目の交渉に先立って二十七日の夕方に開かれた会合で、MRAを代表して出席した三名から、過去二十三年間にわたってMRAがPNGで築いてきた信頼作りや和解のための努力が、MRA映画「フリーダム(自由)」や戦後の独仏和解の架け橋となったイレーヌ・ロー夫人の生涯を描いたビデオ「明日を愛するがゆえに」などを使って伝えられた。三人は双方が相手側の立場に対する理解を深めることに貢献することができた。最後に政府側代表の一人であるソマレ外相が聖フランシスの祈りを捧げ会合は終わった。

初日の交渉会場に現われたブーゲンビル側代表二十人の表情は固く、その瞳には恐れと憎悪が宿っていた。何人かは握手さえ拒み、船内で出された食事に手を付けなかった。その氷のような雰囲気を変えたのはエンデバーに配属されている牧師による事態の平和裡な解決を願う祈りであった。

合意達成寸前になってブーゲンビル革命軍(BRA)代表ジェームス・シングコ氏が、先ず独立を認めよと主張して署名を拒否したり、交渉中、何度か危機的な局面があったが、その都度、ナラコビ法相はインスピレーションを求めて神に祈りを捧げた。

「政府は合意達成の有無に拘らず医薬品の支給をヘリコプターで開始する」とのソマレ外相の発言は交渉に大きな影響を与えた。

ブーゲンビル側も一枚岩だったわけではない。何名かが再び分離独立に固執したため交渉は暗礁に乗り上げた。シングコ氏が黒い肌こそ団結の証しであると話した時、ナラコビ法相は深い思いやりを以って彼にこう諭した。

「わが友ジェームスよ。君の視野は狭すぎないか。国家を一つの肌の色に基づいて作ることは決してできない。それが目的ならば小さすぎる。ブーゲンビル島の赤や白い肌の島民はどうなる。もし黒い肌が君の言うところの団結の証しならば、君は島全体に分裂を招くことになるだろう」。

電気のようなピリピリとした空気が流れ、シングコ氏は沈黙した。ソマレ外相は休憩を宣言した。休憩中、ナラコビ法相は静かな時間を持ち神の声に耳を傾け、確かな考えを得た。そして最後の交渉が始まった。

独立に固執する人たちの政府に対する不信と疑惑は根強かったが、ナラコビ法相らから六～七週間の後、改めて島の将来に関する話合いを行うことなどを条件に公共サービスを再開するという提案がなされた。ブーゲンビル側

は直ちにそれを受け入れ一方的独立宣言（ＵＤＩ）も当面延期された。どちらの側にとっても勝利であった。

その後の光景は忘れがたいものであった。拍手が抱擁が、そして感謝のスピーチがなされた。

「遂に我々は平和を得た」。ＢＲＡ指導者の叔母はこう言って涙を流した。

ニュージーランド海軍のハンター提督は、ニュージーランド政府は必要があれば再び艦船を派遣する用意のあることを伝えるスピーチの中で、「戦争を行うのでなく平和を守ることこそ海軍の真の使命である」と語った。

一連の交渉にＭＲＡが参加したことは「タイム」誌やＰＮＧ各紙、そしてラジオ・オーストラリアやＢＢＣ放送でも伝えられた。

インド

ＭＲＡ青年スタディーコース、来年はインドで開催

一九七七年から十六回にわたってオーストラリアのメルボルン市で開催されてきたＭＲＡ青年スタディー・コースは、来年から当面インドとオーストラリアとで交互に行われることになった。オーストラリアのコースには日本からもこれまで三十名余が参加してきたが、インド・スタディー・コースにも、日本からの参加が望まれている。

来春のコースの概要は次の通り。

一、プログラム

一月四日～一月二十三日　ＭＲＡセンター・アジアプラトー（パンチガーニ）における研修

一月二十四日～一月二十八日　グジュラート州訪問（視察・実地研修・ホームステイ等）

一月二十九日～二月五日　アジアプラトーにおける研修

二月六日～二月十二日　ベンガル州ジャムシェドプール市訪問（視察・実地研修・ホームステイ等）

二月十三日～二月十六日　アジアプラトーにおける研修（コース終了後、スリランカやインドにおける延長コースやボランティア研修も可能）

二、内容

講義（時事問題、各国の歴史や文化、環境問題、リーダーシップ、信仰や道徳）や討論の他に、農業、牧畜、植林の実習、センターの維持管理、産業人会議の準備、運営、スポーツ、音楽、歌、ゲームなどを国籍や人種の異なる青年と寝食を共にしながら行う。

訪問プログラムには、インドの八割を占める農村やアシュラム（ヒンドゥー寺院）、先住民（アディバシ族）、工業地帯などが含まれ、インドの抱える様々な問題やインド社会の各層の人々と直接交流することができる。

三、参加者

アジア・アフリカを中心とする各国の青年数十名。特定テーマに関する英文レポート提出等のため、或る程度高い英語力が必要とされる。

四、講師陣

ダリウス・フォルブス（実業家・インド）

ルーシ・ララ（ジャーナリスト・インド）

スタン・シェパード（オーストラリアＭＲＡ会長）（コーディネーター）

スレッシュ・カトリ夫妻（フィジー）

ビジェラキシミ・スプラマニアン（インド）

五、参加費

約八万円

（お問合せは事務局までご願いします）

台湾MRA国際青年キャンプ(IYC)

テーマ

「希望に満ちた未来を創るための若者の役割」

●会場：台北、高雄

●期間：1980年7月21～30日

10ヶ国から集まった若者たちがアジアの将来や世界の問題を率直に話し合い、心に友情の橋が架けられた

各国の青年が直面する問題を話し合い理解を深める

去る七月二十一日より三十日にかけ台湾の台北、高雄の両市において、MRA国際青年キャンプが(IYC)が「希望に満ちた未来を創るための若者の役割」のテーマで開催された。ドイツ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、マレーシア、シンガポール、韓国からの代表に加え、日本からも大学生二名を含む五名が参加した。更に、地元の台湾はもとより、香港、そしてオーストラリアに留学中の大陸からの留学生も一名参加し、社会人も含む総勢三十四名の青年が十日間を共に過ごした。

インドの恵まれない人々の為に奉仕するマザー・テレサの生き方を描いたビデオを見た後、その生き方からどんなことを学べるかといったことなどを話し合うことからキャンプは始まった。また、参加者がそれぞれ自国の青年たちが直面している問題について語り、その中で自分たちが解決のためにやっていることや、今後こう取り組んでいきたいという抱負などを交換した。

また、スポーツやゲームを共に楽しんだのは勿論、参加者が自国の歌や踊りなどを趣向を凝らして紹介した「文化の夕べ」が、台北、高雄の両市でゲストを招いて開催された。加えて、台湾の学生運動の指導者たちとの意見交換、高雄市長への表敬訪問や高雄港見学、そして仏教寺院を初めとした名所旧跡への訪問、更には屋台での食事体験などの幅広い体験を通し、現在の台湾の社会状況を学ぶ機会を得ることができた。

シンガポールでも同様のキャンプを開いて欲しいとの要請

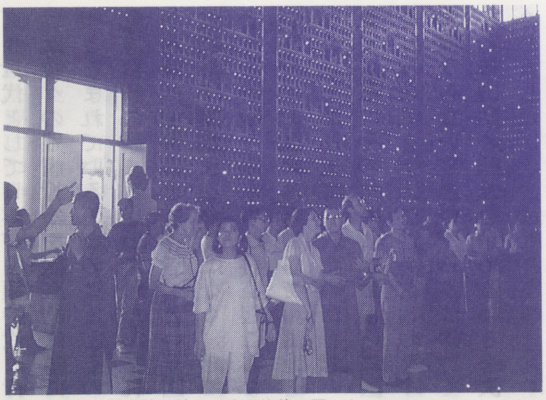
ドイツから参加したエンジニアの青年は、「半年間一緒に働いてきた会社の同僚より、この十日間一緒に過ごしたこのキャンプの仲間により親近感を覚える。ヨーロッパの若い人たちがお互いにもっと心を開いたコミュニケーションを図れるように、自分のアパートをその場の一つにしたい」と述べた。

また、香港からの参加者は、「自分は香港と中国の問題のみを考えがちで、世界の人口の四分の三は中国人ではないという事実をつい忘れてしまう。香港は西欧と中国の架け橋の役割を果たせるはずで、自分の英語の能力をその為に役立てたい」と述べた。

続いてオーストラリアから来た中国大陸からの留学生は、「中国には誇るべき過去の遺産が多いが、現在誇れるものが少ない。しかし、ここに、社会、そして世界のことを考え行動している中国人の若者たちが集まっていることを誇りに思う」と語った。

また、シンガポールの青年団体の指導者は、親の過保護の目立つシンガポールの青年たちは、訳の分からない忙しさの中で方向を失っていると述べ、MRAの精神を紹介するため、同様のキャンプをシンガポールでも開催して欲しいと要請した。

十日間という短い期間ではあったが、国境を超えて、参加者相互の間にしっかりと友情の橋が架けられるキャンプとなった。

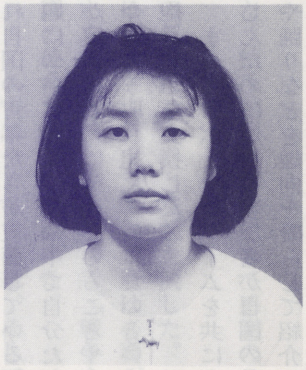


●高雄では仏教寺院を訪れ、意見交換を図った

IYCレポート

心を開くことの大切さを学んだユースキャンプ

山波税務会計事務所
山波 里子



静かな朝の一時を持つことからキャンプは始まった

海外で生活することが、最近の若者のファッションの一つと化しています。私もご多分にもれずそれに右へならえで、これまで何度か体験してきましたが、仏領ニューカレドニアで現地の友人からフランスによる植民地支配下の苦しみを聞く機会があり、それまでの私の流行を追うだけの生き方というものを深く反省させられました。何の苦労もなく生きてきた私は「平和」という問題について余りにも無頓着であったことに気付かされました。

そんなことがきっかけとなり友人からMRAを紹介してもらったのですが、公私共に忙しいという理由で遠ざかっていました。そして時が過ぎ、自分にできることなど一体あるのだろうかと途方に暮れ、家業と家事の繰り返しで毎日が過ぎていくことが虚しく思えていた時、台湾でMRAの国際ユースキャンプがあるので参加しないかというお誘いがあり、もう一度何かを見い出したいという前向きな姿勢で参加を決心いたしました。

MRAが単なる国際交流の団体ではないということは分かっていましたが、具体的に他の団体とどう違うのかということをもっと深く知りたいという思いもありましたし、何とか今回の台湾での滞在を充実したものにし、かつ皆様のお役に立ちたいと張り切ってはみたものの、今まで余り本を読む習慣がなかった私にとって、出発前に多くの資料を読んで他の国のことを勉強することは簡単なことではありませんでしたし、自分の知識の不足や英語力に不安もありましたが、一緒に参加した方々の励ましもあって、台湾へ着いた時には期待に胸を膨らませていました。

さて、その時空港で私たちを出迎えてくれた人は、何と私が数年前にオーストラリアで英語を一緒に勉強した中国人の友人でした。「ここで一体あなた何をしているの！ What a small world.!」で私の台湾ユースキャンプがスタートしました。

キャンプの一日は先ず朝、静かな一時を持ち自分の在り方を見つめ直したり、今日一日の過ごし方を考えることから始まりましたが、これまでそのように静かな時間を持つという習慣のなかった私にとってとても大きな収穫でした。

私にもできることがある

或る日、韓国からの参加者と朝食を共にする機会がありました。日本が過去に彼らの国と人々に行った行為に目を背けることができず、自然な態度で彼らに接することに戸惑いを覚えている自分に気が付きました。そんな私の心境を察してくれたのでしょう、彼らの一人が、自分はかつて日本人に憎しみを抱いていたが今はそれを克服し、これからより良い関係を築くために努力していると会話の口火を切ってくれました。ハングル世代として日本が占領時代に行った数々の残虐行為を徹底的に頭に叩きこまれている筈なのにと、その配慮に胸の詰まる思いでした。これからは「加害者と被害者」という図式にだけ捉われるのではなく、あのような不幸な出来事が再び起こらないようにお互いに努力していこうということを伝えてくれたのだと思います。私はそのためにはお互いの国を知り言葉を学ぶことから始めなければならないと思い、日本に帰ってから韓国語の勉強を始めることを決心しました。

或る台湾の女性は、それまで持っていた日本人に対する恐れや憎しみをこのキャンプに参加し、日本の若者たちと知り合うことによって克服できたと言っていました。戦争を直接は知らない若い女性の心の中にさえ未だに苦い歴史の古傷が残っているということを肌で感じました。私のようなちっぽけな人間でも本当に心を開いて接すれば、人の心の中のしこりを少しずつでも癒していけるのだという自信が湧いてきたような気がします。

このユースキャンプでの体験は、正に、私の人生における一つのターニングポイントになったと言うことができます。

IYCレポート

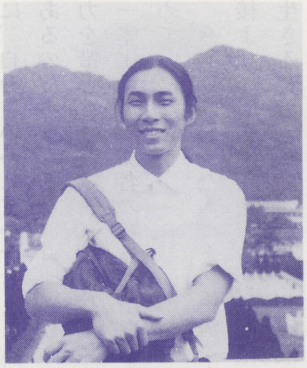
台湾MRA国際青年キャンプに参加して

慶応義塾大学法学部
藤田　寛

社会の中堅層に感じた中心化思考

今回特に印象的だったことは、自国をアジアの中心的存在にしていこうという台湾の人々の意識が全ての討論の中で感じられたことである。二年前に韓国を訪れた時にも同じ様な意識を韓国人の中に感じた。この中心化思考とも言うべき考え方は、特に三十代から四十代の社会の中堅層に強い。第二時世界大戦終結から四十五年が過ぎ、ようやく様々な束縛から解放され始め変貌をとげつつあるアジアの中心としてリーダー的役割を担い、積極的に関わろうとする態度が社会の中核層に色濃く出ているのは興味深いことだ。

しかし、実業家にとっては、世界的な融和の進展に伴って生じた市場獲得競争の激化に対応すべく、組織化・製品単価アップのためのデザイン・マネージメント技術の普及、完成度向上などが望まれているように、国内産業も変貌、淘汰の時期を迎え、また長期的視野に立った投資が減少する傾向にあるなど安閑としてはいられない状況にある。また賃金上昇率が労働生産性の上昇率を約二パーセント上回り、労働力が安いとは言えない状況になりつつあると同時に、マネーゲームの犯濫ともいうべき社会状況に労働者の勤労意欲が衰えるといった新たな課題も生じている。そのため中国本土との関係改善を図りながら民主化の意義を伝えると同時に、中小企業の利点を活用しながら、長期的なスパンで本土への投資を図っていくことなどを初めとして、グローバルなアプローチの中での課題の克服を模索しているようだ。



しかし、公害規制の緩中国本土への公害輸出の問題など、討論と現実の間には大きなギャップが見られたのも事実で、全体的に足並みが揃っていない印象を受けた。

しかし、産業に対する期待は大きく、台湾に対する日本の影響力もまた、計り知れない程大きいと感じられた。

未だに根強く残る日本人への不信感

街で目についたのが、小銃を抱えた兵士の多さである。特に台北に関しては、東京なみのカラフルでファッショナブルなストリートにも、小銃を抱えた兵士を見かけた。若い日本人にとっては、不自然な光景に思えたが、台湾は八七年七月に戒厳令が解除されたばかりの国であるし、軍隊に対する人々の意識も「中国本土の攻撃から台湾を守るため」ということにあり、必ずしも否定的なものではないようだ。歴史的に見てもオランダや日本による支配を受けてきた国民の心情としては、外部勢力に対する不信感をどうしても拭い去ることができないのだろう。台湾の人々が我々外国人に接する時に、深い不安と動揺を心の奥に秘めているように映ることがある。

日本兵が赤ん坊を高く放り投げ、落ちてきたところを銃剣で串刺しにする光景が、現代の日本人男性の前でも頭に浮かんでしまい、どうしても普通の状態でいられないと二十代後半の女性に面と向かって言われた時は、返す言葉に困ったものだった。皮肉にも日本の占領時に台湾特産物である砂糖きび、ショウノウ、米、ウーロン茶などの生産力が、経済的な搾取を受けながらも向上し、また抗日運動を通して台湾人自身のアイデンティティーが意識化されるようになったことなどの日本による植民地化の功罪について論じることは、

●各国の青年たちは率直に意見を交換した。発表する香港と中国からの参加者

動揺する台湾人の複雑な気持ちの前では、ちょっとできなかった。

また、太平洋戦争中に日本の兵士として強制的に戦場へ駆り立てられ、不運にも半身不随となって帰ってきた台湾人に、日本政府は充分な賠償や治療を行っていないと非難されると、政府がひどく遠い存在に感じられ、自分の意識を積極的に日本の政治に反映してゆくなど全く不可能だとの思いが募り、このことを認めざるをえない自分、認めてしまっている自分をひどく情けなく、また恥しく思うのであった。

歴史のもたらした緊張感、不信感を和らげる役割

一方、台湾の学生達を見ても、国の政治よりもアルバイトに精を出し、旅行にキャンプにカラオケにと楽しんでいるようで、生活意識では私自身と表面的には違和感はなく、日本、台湾ともに政治に対する一部の学生の関心が薄れているといった傾向があるのを感じた。しかし他国の視点から日本政府の新たな醜態を知らされるのは、実際にこのような国際会議に参加し苦い思いを重ねなければできない体験であろうし、自分が歴史の延長線上に立っていることを感じるのもこんな時くらいのものだろう。

一方、日本を懐かしみ、占領時代に教えられた日本語で話しかけてくる台湾人も多かった。私は学生としての、そして戦争を全く知らない世代としての役割は、歴史のもたらした緊張感、不信感を和らげることではないかと考えた。これは台湾に対してだけではなく、韓国、中国、香港、マレーシアなどにも行うべきことだと思う。

会議期間中は気さくに誠意を持って行動するように心がけた。サラリーマンでもなければ実業家でもない学生の私には、プラクティカルなことではほとんど寄与できない。しかし、MRA会議の良さは、私のような学生にも示すことのできる誠意や友情、そして親睦を深めるといった些細なことも、宝のように大切に育てようとする雰囲気であり、学生は学生なりに無益な気遣いをせず存分に、自分をいかしてゆけるところにあるのだろう。また、自他ともに協力を惜しまない雰囲気はキャンプを一体化し、参加者の意識の結束を高めていたと思う。

今回知り合った人々との交流を今後より一層発展させ、二十一世紀に生きる若者としての役割を共に模索していきたい。

新しい出版物のご案内

日本の進路を決めた10年

。国境を越えた平和のかけ橋。

元・MRA日本駐在代表
バーゼル・エントウィッセル著
藤田幸久訳

ジャパンタイムズ判　定価1800円

本書は、生活に追われ、希望を失っていた日本人の中に、真の民主主義に目覚め、国際社会に復帰しようという意欲をかき立てようとした十年間の著者の体験をつづったものである。有力な政治家、実業家を回想しながら著者は、当時の日本人の平和に対する真しな努力を伝えている。著者の眼は経済大国として新たな国際的孤立に直面している現在の日本に対する警告の意味を含んでいる。特に韓国やフィリピンへの謝罪を率直に表明した当時のMRAの日本人関係者の態度は、最近の日韓関係の推移の出発点として注目される。（90年6月3日朝日新聞読書欄書評より抜粋）

○全国の書店でお求め下さい。
MRAでもお取り寄せいたします。

IYCレポート

『日本人は嫌いだ！』

—閉じていた心が開いた—

日本大学経済学部
飯島 亜由子

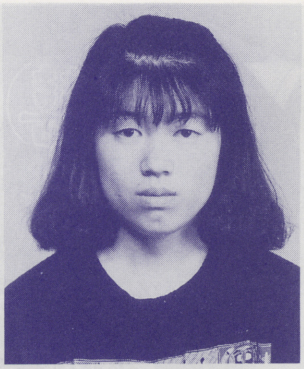
私の生き方を変えたMRA国際青年キャンプ

私は七月に台湾で開催されたMRA国際青年キャンプに参加しました。それまでMRAのことはよく知らず、このキャンプも初めは半分遊び気分で参加したのですが、私のこれまでの生き方を変えてしまったと言っても過言ではない大変貴重な経験をすることができました。

今回の会場が台湾だったということもあり、参加者はアジア諸国の若者たちが殆どでした。そして過去の日本の行為に対するわだかまりが未だに彼らの心の中に残っていることを知りましたが、韓国の参加者の方々は、私たち日本人にとても好意的で、態度もやさしく接してくれました。その中には中学生や高校生もいて、私自身も含めて英語での意思の疎通がなかなかうまくいかない場面もありましたが、喜怒哀楽の感情は万国共通、ジェスチャーも交え楽しく交流できました。

また、韓国では、今でも日本人に対して良い感情を持っていない人々が多いことや、受験勉強などが日本より大変であることなど、韓国の内情を直に聞かせてもらえ、隣国に対する認識を新たにしました。

台湾の方々もとてもやさしく面倒見のいい人たちが多く、MRA関係者以外の台湾人も私が日本人だと分かると片言の日本語でも喜んで話しかけてくれました。



日本だけが戦争を過去のものとして忘れている

今回、私にとって最も衝撃的だったことは、或る朝のミーティングの席で、台湾の女性から「日本人は嫌いだ」と言われたことです。先の戦争での日本軍による無差別殺戮、さらに今日台湾に来る日本人男性の目的の不純さ、無秩序な商売の仕方など、戦時中から現代に至るまでの日本人の行いが彼女を日本人嫌いにしてしまったのでした。彼女の話に私は大変ショックを受けましたが、全く弁解の余地はありませんでしたし、彼女だけが日本人に対して悪い感情を持っているのではないのだとも思いました。未だに南京大虐殺の時の光景を夢で見てうなされる方もいるとも聞きました。日本だけが戦争を過去のこととして忘れてしまっていると思いました。私も恥ずかしいことですが、昔そのようなことがあったという事実は知っていても、それを深く考えたことは一度もありませんでした。

これからこの問題にどう取り組んでいけばいいのか私にはまだ分かりませんが、先ず、こういうことについて友人たちと話し合うことから始めていこうと思います。同時に、過去の出来事についてもっと知らなければならないと思います。

今回のキャンプを通して日本人に心を開いた彼女は、それからは日本のことについて人一倍興味を示し、浴衣を着て写真に収まったり、鶴の

新しいビデオのご案内

日本語吹替版
(VHS/ベータ)
好評頒布中！

明日を愛するがゆえに
第二次世界大戦後独仏和解のきっかけを作った —イレーヌ・ロー夫人の生涯—

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

頒価5,000円
(郵送料サービス)

お申し込みは
MRA事務局へ
03(821)3737

折り方を習ったりしました。さらに、キャンプ終了後に旅行を予定していたある日本人参加者のために、自分の仕事を休んで案内するとまで言ってくれたのです。彼女が正直な気持を私たちに伝え、そして心を開いてくれたことが私は本当にうれしかったのです。

他人に対する思いやりの心を持つことを決心する

私はこのキャンプで、これまで余りにも近隣諸国について無知であったことを身を以て体験し、これからそういうことをもっと学んでいかなければならないと思いました。また、台湾ではどこへ行っても人々が見ず知らずの私にやさしく接してくれたので、私も他人に対しての思いやりをもっと持とうと決心しました。キャンプ中一番不便を感じたのは、語学力の不足でした。中国語は大学で一年位習っていますが会話は無理で、さらに十年近く勉強しているはずの英語ですら思ったことを言えないことの方が多く、もっと勉強しておけば良かったとつくづく思いました。

あっという間の十日間でしたが、参加者の人たちと本当に仲良くなれました。また来年も参加したいと思います。

●キャンプの半ばに台湾の参加者二人が結婚、被露宴に全員が招かれた

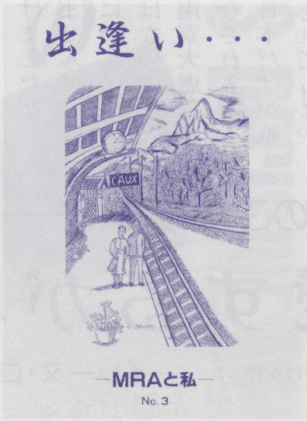
●「文化の夕べ」で伝統の"仮面踊り"を演じる韓国の代表

—私たち一人ひとりの在り方が国の在り方—

○MRA体験記

頒価 300円

出逢い・・・MRAと私No.3



好評頒布中！

お申し込みはMRAへどうぞ 03(821)3737

事務局近況

●韓国、台湾、香港、マレーシア、インドネシア、ジンバブエ、ポーランド、アメリカ、スイスから16名の海外代表、および日本に在住する外国人の方々(中国、韓国、ラオス、マレーシア、インドネシア、ネパール、パラグアイ、イギリス、フランス）約30名を迎えて行われた1990年度MRA日本キャンペーン「心の国際交流・パートⅣ」は、10月20日から21日にかけて小田原のアジアセンターで行われた小田原国際会議を皮切りに、大阪、神戸、浦和など各地を訪れました。今回は「融和を求めて—家庭・社会・自然・そして世界を考える」というサブテーマの下、家庭、職場、学校、自然、さらには国同士の融和をもたらすために私たち一人一人にできることを、アジアを初め各国からの友人たちと話し合いました。詳しくは次号のレポートでお伝えします。

さて、今回、開発途上国からキャンペーンに参加された方々の滞在費等の一助にとクリスマスバザーを来る12月1日㈯午前11時から午後1時まで開催いたします。ご家庭でご協力いただける品(但し、未使用、食品は賞味期限内)がございましたら、ご提供を賜りたくお願い申し上げます。

●来る12月8日㈯午後2時より4時半まで第13回通常総会を全郵政会館（最寄り駅JR千駄ケ谷）で開催いたします。